交付決定額(研究期間全体):(直接経費)

7

1

科学研究費助成事業

研究成果報告書

		平成	27	午	5	月	12	2 日現	在
幾関番号:	3 2 6 8 2								
研究種目:	基盤研究(C)								
研究期間:	2012 ~ 2014								
課題番号:	2 4 5 5 0 1 2 3								
研究課題名	(和文)脱水素シリル化反応による有用有機ケイ素化合物の効率的	りな実施	用的	合成法(の開	発			
研究課題名	(英文)Development of Efficient and Practical Synthetic Me by Dehydrogenative Coupling	thod c	of O	rganosi	ilic	on (Comp	ounds	
研究代表者									
土本界	久(Tsuchimoto, Teruhisa)								
明治大学	・理工学部・准教授								
研究者番	号:8 0 3 1 3 7 1 6								

四穴は田の概要(和立)・ 2年の四穴期間を通して、以ての四穴は田を送げることができた

研究成果の概要(和文): 3年の研究期間を通して、以下の研究成果を挙げることができた。なお、項目1)と3) については、国際学術雑誌に速報論文が掲載済みである。1)亜鉛ルイス酸触媒による N-未置換インドールの脱水素 N-シリル化反応,2)亜鉛ルイス酸触媒による N-置換インドールの脱水素 C3-シリル化反応,3)亜鉛ルイス酸触媒 による末端アルキンの脱水素シリル化反応,4)亜鉛ルイス酸触媒によるインデン誘導体の脱水素シリル化反応。

4,300,000円

研究成果の概要(英文): During the research period of three years, I developed the following four types of deydrogenetive couplings for synthesizing useful organosilicon compounds: 1) zinc Lewis acid-catalyzed dehydrogenative N-silylation of N-unsubstituted indoles; 2) zinc Lewis acid-catalyzed dehydrogenative C3-silylation of N-substituted indoles; 3) zinc Lewis acid-catalyzed dehydrogenative silylation of terminal alkynes; 4) zinc Lewis acid-catalyzed dehydrogenative silylation of indenes.

研究分野: 有機合成化学

キーワード: 触媒設計・反応 ルイス酸 脱水素シリル化 インドール アルキン アルケン

1. 研究開始当初の背景

ケイ素官能基は,容易に着脱可能な使い勝 手の良さから、生理活性天然物等の多段階合 成プロセスにおける反応性官能基の保護基 として合成化学上重要な役割を担っている。 この合成中間体としての有用性に加えて、有 機ケイ素化合物は、檜山カップリング・細見 -櫻井反応等に代表される,数多くの有機変 換反応の反応剤として重要な位置付けにあ るほか、ケイ素原子特有の $\sigma-\pi$ 共役効果の発 現により、光電子材料としても注目されてい る肝要な化合物である。本申請課題では、脱 水素シリル化による N-シリルインドール, C3-シリルインドール,アルキニルシランお よびアリルシランの合成法の確立を目指し たが、これらの化合物をターゲットとしたの は、合成中間体・反応剤・光電子材料として の需要が多い一方で,既存の合成法は特に, 原子効率・官能基許容性・反応操作性の面で 問題を抱えていたからである。例えば、前出 の有機ケイ素化合物は、化学量論量の金属塩 基 (base-met) を用いたメタル化と,これに続 くハロシラン (X-Si) との反応による 2 段 階で合成されるのが最も一般的である。ここ では、良好な反応効率を利点とする反面、実 は、以下の三つの根本的問題点を抱えてい る:(1) プロトンを捕捉した塩基部位 (H-base) と金属ハロゲン化物 (met-X) が何 れも量論量副生するため、原子効率が悪い。 (2) 求電子的で耐塩基性の低い官能基は金属 塩基と反応してしまうため、官能基許容性の 観点で制限がある。(3) 金属塩基・ハロシラ ン共に容易に加水分解を受けるため、厳密な 無水条件が必要であり,反応剤の取り扱いに 起因する反応操作性の点で難がある。これに 対し、上記の問題点を克服した合成法が提供 できれば、これまでは対応不可能であった状 況下での有機ケイ素化合物の合成が可能と なり,入手可能な骨格の拡大に伴って,有機 ケイ素化合物の適用・応用範囲は飛躍的に拡 大できる。このための方法論の開発を目指し て取り組んだのが本申請課題である。

2. 研究の目的

本研究の研究開始当初の目的は、原子効率・反応効率・官能基許容性・基質一般性・ 反応操作性の全ての面で優れた、有機ケイ素 化合物の新しい実用的な合成反応を開発する ことであった。この目的を達成するために、 ルイス酸触媒存在下での、ヒドロシラン (H-Si)による前出の有機化合物の脱水素シリ ル化反応の実現を目指した。

3. 研究の方法

以下に,研究開始当初に計画した,各年次 の研究計画・方法を示す。

【平成24年度】式(1)と(3)の反応に関 しての,基質適用範囲の検討および速報論文 としての研究成果の取りまとめ。 【平成25年度】式(2)と(4)の反応に関 しての,反応条件・基質適用範囲の検討。 【平成26年度】式(2)と(4)の反応への 継続的な取り組みと,式(4)の反応に関して の研究成果の取りまとめ。さらに,式(1)-(3) の反応の σ-π 共役効果を有する化合物合成 へと応用と,式(1)と(2)の反応の結果と, 式(3)の反応の結果のフルペーパーとして の研究成果の取りまとめ。



```
4. 研究成果
```

(1) ₩未置換インドールの脱水素 ₩シリル化 反応

当初の研究計画に基づき,N-未置換インド ールの脱水素シリル化反応から検討した。ま ず,インドールとメチルジフェニルシランの 反応を利用して,優れた反応条件の探索をお こなった。結果を Table 1 にまとめたが, 種々検討した結果,ルイス酸に亜鉛トリフラ ート,溶媒にプロピオニトリル,添加剤とし ての有機塩基にピリジンを用いた 80 ℃,15 時間の反応条件において (entry 21),目的生 成物の 3a が定量的に得られることがわか った。

上記で定めた反応条件を基本とし、引き続いて基質の適用範囲について調べた (Table 2)。本反応には、インドール以外に、メチル 基やイソプロピル基といったアルキル基の

 Table
 1. Lewis
 Acid-Catalyzed
 Dehydrogenative

 N-Silylation of Indole with Methyldiphenylsilane^a
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 <

\bigwedge	1:1.2	(10 or 5	mol %)		\searrow
	Y + ⊓Silvier N	solvent,	80 °C	- L	⊥/
1a	H 2a	15 h	3a SiMe	ePh ₂	4a ^H
				2	
	Lewis		organic base	yield	$(\%)^{b}$
entry	acid	solvent	(pKa value)	3a	4a
1	In(OTf) ₃	EtCN	none	4	13
2	Bi(OTf)3	EtCN	none	<1	14
3	Cu(OTf) ₂	EtCN	none	<1	1
4	AgOTf	EtCN	none	5	2
5	Sc(OTf) ₃	EtCN	none	<1	3
6	Zn(OTf) ₂	EtCN	none	99	1
7	Zn(ONf)2	EtCN	none	84	<1
8	ZnCl ₂	EtCN	none	<1	<1
9	ZnBr ₂	EtCN	none	<1	<1
10	Zn(OTf)2	MeCN	none	70	<1
11	Zn(OTf)2	DMF^{c}	none	<1	<1
12	Zn(OTf)2	MeNO ₂	none	<1	<1
13	Zn(OTf) ₂	$(CH_2Cl)_2$	none	<1	<1
14	Zn(OTf)2	toluene	none	<1	<1
15	Zn(OTf)2	Bu_2O	none	<1	<1
16	Zn(OTf)2	EtCN	none	52	3
17	Zn(OTf)2	EtCN	Et ₃ N (10.8)	<1	<1
18	Zn(OTf) ₂	EtCN	$DMAP^{d}$ (9.7)	23	<1
19	Zn(OTf)2	EtCN	2,6-lutidine (6.7)	46	<1
20	Zn(OTf) ₂	EtCN	4-tBupyridine (6.0)	81	<1
21	Zn(OTf) ₂	EtCN	pyridine (5.3)	>99	<1

^{*a*} Reagents: **1a** (0.40 mmol), **2a** (0.48 mmol), Lewis acid (40 μ mol for entries 1–15 or 20 μ mol for entries 16–21), organic base (0.40 mmol), solvent (0.40 mL). ^{*b*} Determined by GC. ^{*c*} DMF = *N*,*N*-dimethylformamide. ^{*d*} DMAP = 4-(dimethylamino)pyridine.

ほか、様々な置換基を持つ多様なインドール の利用が可能であり、何れの場合も対応する *N*-シリルインドールが高収率で得られた。ジ フェニルメチルシラン以外のヒドロシラン もインドール誘導体の窒素原子上に導入す ることができる。具体的には、ジメチルフェ ニルシランに加えて、トリエチルシランやベ ンジルジメチルシランのようなトリアルキ ルシランが利用可能であり、いずれの場合も、 高収率で対応する *N*-シリル体を与えた。

Table 2. Zinc-Catalyzed Dehydrogenative N-Silylation of Indoles with Hydrosilanes^a



^a Reagents (unless otherwise specified): 1 (0.40 mmol), 2 (0.48–0.80 mmol), Zn(OTf)₂ (20–60 µmol), pyridine (0.20–0.40 mmol), EtCN (0.40 mL). Yields of isolated **3** based on **1** are shown here. See Supporting Information for further details. ^b PrCN instead of EtCN was used as a solvent. ^c Performed with a 2 M solution of the indole (0.80 mmol) and pyridine (0.80 mmol). ^d Performed with a 2 M solution of the indole (0.80 mmol) in PrCN (0.40 mL), containing **2a** (1.2 mmol), Zn(OTf)₂ (40 µmol) and pyridine (0.80 mmol) and pyridine (0.40 mL), containing HSi(*i*Pr)₃ (1.6 mmol), Zn(OTf)₂ (0.12 mmol) and pyridine (0.40 mmol).

(2) ₩置換インドールの脱水素 C3-シリル化 反応

上記反応については、反応機構の考察についてもおこなったが、推定反応機構に基づけ

ば,窒素原子上に置換基を持つインドールを 利用することで、インドールの C3-位もシリ ル化できるだろう、と考えた。幾つかの実 験を行い、C3-シリル化に適した反応条件の 探索を行ったところ、Table 3 に示した最下 段の反応条件において、目的とする C3-シリ ルインドールを、収率 85% で得ることに成 功した。

 Table
 3.
 Lewis
 Acid-Catalyzed
 Dehydrogenative

 N-Silylation of Indole with Methyldiphenylsilane
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1
 1<

	catalyst (organic b	5 mol%) base (1 equ	iiv.)		SiMePh ₂
	solvent		-	ݘ╨╷	2 N
2a (1.2 equi	V)				Ĭ
T_{1} T_{2} T_{2} T_{2} T_{2} T_{2} T_{2} T_{2}	mol %)	()	/	\sim	3
	squiv) ►		₩mp.	time.	vield (%)
catalyst organic base	solvent	112	(°C)	(h)	of 3 ^a
5 ZRUPTE)2 pyridine	EtCN	7:1931,2viel	2 d 80	8 ¹ 91%	vield
6 gangazole) pyridine	EtCN	89 °G, <u>1</u> 5 h	100	995°C, 2	245
Zn(OTf)2 pyridine	PrCN	≓1:1.2	130	15	45
Zn(OTf)2 HpSilling (0.45	eqquind (1/1.5	130	24/	63
Zn(NT(2)2 pyridine 0.45 equ	%) Ji₽rCN	1: Ņ5	130	24 N	67
Zn(NT12)2 FfCMe-pyridine	PrCN	1:15 ^{SiMeF}	°130 °	r 24 Sil	MePh
^a Determined by ¹ H NMR.		N N V	IJ	Ń.	
1a (indole)		Ľ	_)	<u>\</u>	/
5 (pyrrole)	-	5	_		

上記で見つけた反応発電機構本 2005,244 質 の適用範囲について調べた (Table 4)。現在の ところ, Table 4 に示したインドール基質と ヒドロシランが利用できることがわかって おり,対応する C3-シリルインドールが中程 度から高収率で得られた。

 Table 4. Zinc-Catalyzed Dehydrogenative C3-Silylation

 of Indoles with Hydrosilanes



(3) 末端アルキンの脱水素シリル化反応

インドール基質の替わりに、末端アルキン を用いての脱水素シリル化反応についても 検討をおこなった。まず、1-オクチンとメチ ルジフェニルシランの反応を利用して、優れ た反応条件の探索をおこなった。結果を Table 5 にまとめたが、種々検討した結果、 ルイス酸に亜鉛トリフラート、溶媒にプロピ オニトリル、添加剤としての有機塩基にピリ ジンを用いた 100 °C, 30 時間の反応条件に おいて (entry 2)、目的生成物の 3a が定量的 に得られることがわかった。この条件は、実 は、反応温度と反応時間が異なるだけで、N-

 Table
 5. Lewis
 Acid-Catalyzed
 Dehydrogenative

 Silylation of 1-Octyne with Methyldiphenylsilane^a
 1000 methyldiphenylsilane^a
 1000 methyldiphenylsilane^a



			organic	yield (%) of	
entry	Lewis acid	solvent	base	3a ^b	4a–6a [°]
1	Zn(OTf) ₂	EtCN	none	48	3
2	Zn(OTf) ₂	EtCN	pyridine	>99	<1
3	Cu(OTf)2	EtCN	pyridine	<1	<1
4	AgOTf	EtCN	pyridine	<1	<1
5	In(OTf) ₃	EtCN	pyridine	<1	<1
6	Bi(OTf)3	EtCN	pyridine	<1	<1
7	Sc(OTf) ₃	EtCN	pyridine	<1	<1
8	ZnF_2	EtCN	pyridine	<1	<1
9	ZnCl ₂	EtCN	pyridine	<1	<1
10	Zn(OTf) ₂	EtCN	$DMAP^{d}$	36	2
11	Zn(OTf) ₂	EtCN	Et ₃ N	91	5
12	Zn(OTf) ₂	EtCN	DBU^{e}	<1	<1
13	Zn(OTf) ₂	MeCN	pyridine	73	<1
14	Zn(OTf) ₂	DMF	pyridine	<1	<1
15	Zn(OTf) ₂	1,4-dioxane	pyridine	41	<1
16	Zn(OTf) ₂	Bu ₂ O	pyridine	<1	<1
17	Zn(OTf) ₂	$MeNO_2$	pyridine	<1	<1
18	$Zn(OTf)_2$	PhMe	pyridine	18	1

^{*a*} Reagents: **1a** (0.40 mmol), **2a** (0.60 mmol), Lewis acid (20 μmol), organic base (80 μmol), solvent (0.40 mL). ^{*b*} Determined by ¹H NMR. ^{*c*} Determined by GC. ^{*d*} DMAP = 4-(dimethylamino)pyridine. ^{*c*} DBU = 1,8-diazabicyclo[5.4.0]undec-7-ene. ^{*f*} DMF = *N*,*N*-dimethylformamide.

未置換インドールの脱水素シリル化反応の 条件と同じである。このことは,我々が見つ けた方法論が,幅広い基質に適用可能な一般 性を備えていることを示しており,今後も, 他の有機基質への展開が大いに期待できる。

上記で定めた反応条件を基本とし、基質の 適用範囲について調べた (Table 6)。本反応に は、1-オクチンのような単純な脂肪族末端ア ルキン以外に,枝分かれ構造をもつシクロへ キシルアセチレンや、アルキル鎖末端にフェ ニル基・クロロ基・アセトキシ基・フタルイ ミドイル基などを持つ脂肪族末端アルキン の利用が可能であり,いずれの場合も対応す るアルキニルシランが収率よく得られた。脂 肪族末端アルキンだけでなく、芳香族末端ア ルキンも利用できる。具体的には、芳香環の 電子的環境に左右されることなく反応が首 尾よく進行したほか、エチニルフェロセンや 共役エンイン構造のシクロヘキセニルアセ チレンも本反応に利用することができる。ジ フェニルメチルシラン以外のヒドロシラン の反応も収率よく進行することがわかって いる。

(4) インデン誘導体の脱水素シリル化反応

当初の研究計画に従って、アルケン基質に おいてのアリル位脱水素シリル化反応につ いても検討をおこなった。基質の選択に至っ ては、研究の開始に先立って、以下のような 作業仮説を立てた (Scheme 1)。注目したのは、 求核剤となる有機基質の酸性度、すなわち酸 解離定数 pK_a である。既に実現済みの反応 で活性化対象となってきた末端アルキンや

Table 6. Zinc-Catalyzed Dehydrogenative Silylation of Terminal Alkynes with Hydrosilanes^a



^{*a*} Reagents: **1** (0.40 mmol), **2** (0.60–1.6 mmol), $Zn(OTf)_2$ (20–40 µmol), pyridine (0.080–0.20 mmol), EtCN (0.40 mL). Yields of isolated **3** based on **1** are shown here. See Supporting Information for further details. ^{*b*} Bn = benzyl. ^{*c*} *c*-Hex = cyclohexyl.

インドールは、以下に示した pKa 値を持つ が、これらの化合物と同程度以下の pKa 値 を持つ化合物を活性化対象の基質として選 択すれば、我々のシステムによって脱水素シ リル化が可能になるのではなかと期待した。 その候補になったのが、20.1 の pKa 値を持 つ、末端アルキンやインドールよりも酸性度 の高いアリル位水素を持つインデンである。 まず、反応条件の検討から始めた。ここで

は、これまでの、プロピオニトリル溶媒中で 有機塩基としてのピリジンを用いる条件は 無効であったが、試行錯誤の末に、トリエチ



Scheme 1. A Working Hypothesis for Dehydrogenative Silylation of Indenes



ルアミンを有機塩基兼溶媒として用いる条件が,対応するシリル体を二重結合の位置異性体混合物として与えることがわかった (Table 7)。現在は,基質の適用範囲について 調べるとともに,アリルシランタイプの生成 物を炭素-炭素結合形成反応に応用する検討 をおこなっている。

Table 7. Zinc-Catalyzed Dehydrogenative Silylation ofIndene with Methyldiphenylsilane

+ $Zn(OTf)_2$ + $(5 \text{ mol}\%)$ HSi 100 °C, 30 h Si = SiMe ₂ Ph	γ^+
solvent	yield (%) ^a
pyridine	<1 (n.d.) ^b
4-methylpyridine	6 (78:22)
2,6-dimethylpyridine	<1 (n.d.)
	<1 (n.d.)
N-methylpiperidine	<1 (n.d.)
N-methylpyrrolidine	<1 (n.d.)
TMEDA Me ₂ N ~~ ^{NMe} 2	<1 (n.d.)
Et ₃ N	77 (80:20)
Et ₂ NBu	37 (78:22)
EtN/Pr ₂	6 (73:27)

^a Determined by ¹H NMR. ^b n.d. = not determined.

以上のように、ルイス酸触媒を用いること による、幾つかの有機基質に対する脱水素シ リル化反応の開発に成功したが、これらは、 ルイス酸触媒を用いることで有機基質を脱 水素シリル化することに成功した世界で初 めての例である。この種の反応がこれまで、 高価でかつ、合成に手間を要する後周期遷移 金属触媒に依存していたことから判断する と、我々の反応は極めて画期的であり、実用 的であるといえる。各反応に対する反応条件 の共通性から判断しても、極めて一般性に優 れていると言える。今後、他の有機基質への 展開も十分に期待できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- "Zinc-catalyzed dehydrogenative N-silylation of indoles with hydrosilanes" <u>Tsuchimoto, T.;</u> Iketani, Y.; Sekine, M. *Chem. Eur. J.* 2012, *18*, 9500–9504 (DOI: 10.1002/chem.201200651). (査読有)
- (2) "Dehydrogenative silylation of terminal alkynes with hydrosilanes under zinc-pyridine catalysis" <u>Tsuchimoto, T.;</u> Fujii, M.; Iketani, Y.; Sekine, M. Adv. Synth. Catal. 2012, 354, 2959–2964 (DOI: 10.1002/adsc.201200310).(査読有)

〔学会発表〕(計 7 件)

- (1) "亜鉛触媒によるヒドロシランを用いた インドール類の脱水素シリル化反応"関 根大・池谷慶彦・土本晃久,第102回有 機合成シンポジウム講演予稿集, P-3, pp. 124-125 [早稲田大学 (東京), 2012年11 月8日~11月9日]
- (2) "Zinc-Catalyzed Dehydrogenative Silylation of Indoles with Hydrosilanes" Masaru Sekine, Yoshihiko Iketani and <u>Teruhisa Tsuchimoto</u>, 第7回創造機能化学国際フォーラム (IFOC-7) [東京大学(東京), 2012年11月18日~11月19日]
- (3) "亜鉛触媒によるインドール類とヒドロシランの脱水素 N-シリル化反応に対する機構的考察と脱水素 C-シリル化反応、つの応用"関根大・池谷慶彦・<u>土本晃久</u>, 日本化学会第 93 春季年会 [立命館大学 (滋賀), 2013 年 3 月 22 日~3 月 25 日]
- (4) "亜鉛触媒によるヒドロシランを用いた インドール類の脱水素シリル化反応"鎌 倉大貴・関根大・池谷慶彦・<u>土本晃久</u>, 第3回CSJ化学フェスタ2013[タワ ーホール船堀(東京),2013年10月21 日~10月23日]
- (5) "亜鉛触媒によるヒドロシランを用いた インドール類の脱水素シリル化反応"鎌 倉大貴・池谷慶彦・関根大・<u>土本晃久</u>, 第3回 JACI/GSC シンポジウム [東京 国際フォーラム (東京), 2014 年 5 月 22 日~5 月 23 日]
- (6) "Zinc-Catalyzed Dehydrogenative Silylation of Indoles with Hydrosilanes" Daiki KAMAKURA, Yoshihiko IKETANI, Masaru SEKINE, and <u>Teruhisa TSUCHIMOTO</u>, XXVI International Conference on Organometallic Chemistry (ICOMC 2014), [ロイトン札幌 (札幌), 2014 年 7 月 13 日~7 月 18 日]
- (7) "亜鉛触媒によるヒドロシランを用いた インデン類の脱水素シリル化反応" 柴田 大輔・土本晃久, 日本化学会第 95 春季 年会 [日本大学 (千葉), 2015 年 3 月 26 日~3 月 29 日]

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕○出願状況(計 0 件)○取得状況(計 0 件)

〔その他〕 ホームページ等

http://www.isc.meiji.ac.jp/~tsuchi/

6. 研究組織

(1)研究代表者
 土本 晃久 (TSUCHIMOTO, Teruhisa)
 明治大学・理工学部・准教授
 研究者番号: 80313716